

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23601004

研究課題名(和文) 青少年のネットワーク環境における社会的つながりの認識に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic research on the youth social relationship cognition in network

研究代表者

石川 真 (Ishikawa, Makoto)

上越教育大学・学校教育研究科(研究院)・准教授

研究者番号：60318813

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：現代の青少年(子ども)がさまざまなツールやメディアを利用して、ネットワーク上において他者とのような関わり方をしているかを明らかとすることを目的とした。とりわけ、その関わり方に社会的スキルの違いがどのような影響を及ぼすかについて着目し、その傾向を探った。その結果、メール送信からみた他者への振る舞い、SNS利用時における他者への振る舞いのいずれも社会的スキルの違いが影響を及ぼしていることが明らかとなった。また、それらの結果より、社会的スキルの高い者の方が低い者よりも望ましい他者との関わり方の傾向であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the features of the youth of today relationships with company in the online communications (including with SNS: social networking services) and the social media community. Especially, it was focused on the influence of the social skills levels on the youth interactive behaviors.

As a result, it was found that the social skills levels effected on the youth interactive behaviors in the online communications and interaction on SNS. In these results, it was suggested that the high social skill group was more desirable interactive behavior with company than the low social skill one.

研究分野：教育学

キーワード：つながり 社会的スキル 関わり コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

青少年たちの間に広まっているネット上、たとえば学校裏サイトでのいじめの現状を踏まえ、文部科学省は 2008 年に学校教員向けに『「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアル・事例集』を発表した。また、現行の学習指導要領においても情報モラル教育の重要性が指摘されている。子どもが関わったこうしたネット環境下での諸問題への取り組みは緒に就いたばかりである。

ネット上のコミュニケーションに対しては、対面場面と異なり、相手の手がかりが欠如している点や、匿名性の高い環境などのマイナスの側面について、ネット上の子どもを守るという観点から、関心が非常に高まっているといえる。しかし、そうした事象のみならず、ネット上でのコミュニケーションは、自己開示されやすい傾向や、対面よりも正直に会話ができる傾向などのプラスの側面にも目を向けることも、社会、他者との関わり方としてのネット上における現代の青少年の行動の傾向を探る上で重要であると考えられる。

一方、学校現場において、グループ学習は数多くの授業で取り入れられているものの、現時点では、グループ学習の進め方や対人関係のスキル指導などの複数の組み合わせによる指導のあり方については検討すべき課題の一つと考えられる。一方で、現代社会においては、経済産業省(2006)が提唱している社会人基礎力や、文部科学省が提示している今後特に求められる教員の資質能力のように、さまざまな他者と協力し合って課せられた仕事に取り組んでいく力が求められている。このような状況を踏まえると、教育環境の中で子どもたちの社会的相互作用や協調性に着目した対人関係のスキルを高めていく指導が今まで以上に求められることが考えられる。

2. 研究の目的

現代の青少年(子ども)は、リアルな社会とネットワーク上の社会という二つの並行した社会の中で成長・発達している。このような現状を踏まえ、本研究では、ネットワーク上におけるリアルな社会において、他者との相互作用過程を通して、青少年がどのようにつながり、関わっていくか、その特徴を探ることを目的とする。さらに、ネットワーク上の他者との関わり方に対する対人関係のスキル(社会的スキル)の違いがどのような影響を及ぼすかについて着目する。なお、ネットワークを介して他者とつながるためのメディアやサービスは、対象者にとって日常生活で使用頻度の高いものを調査対象とする。

(1) 対人関係の親密さの違いや社会的スキルの違いに着目し、コミュニケーションツールとして利用頻度の高いメールによるコミュニケーション行動にどのような傾向が見られるかを探ることを目的とする。とりわけ、

メールの送信に関わる振る舞い方に焦点を当て、相手との関わり方の特徴について明らかとする。

(2) 社会的スキルの違いがソーシャル・ネットワークキング・サービス(SNS)を利用する際、コミュニケーション行動や振る舞いにどのような影響を及ぼすか、その傾向を探ることを目的とする。とりわけ、SNSに参加している他者との関わり方の特徴について明らかとする。

(3) さまざまな SNS が登場する中にあって、ソーシャルメディア上のコミュニティへの関わり方も多様である。そこで、当該コミュニティへの関与の違いが、当該コミュニティの認知や他者との関わり方にどのような影響を及ぼすか、その傾向を探ることを目的とする。とりわけ、社会的スキルの違いによる影響、および、コミュニティの関わり方においては、自ら発信して関与する「発信型」と閲覧に留まる関与である「傍観型」の 2 つの参加形態に焦点を当てることとする。

3. 研究の方法

本研究では青少年のネット上の他者との関わり方の特徴を探る上で、菊池(1988)の社会的スキル測定尺度を採用し、利用頻度の高いコミュニケーションツール、メディアに関してオリジナルの質問紙を作成し調査を実施した。

(1) 大学生を対象に質問紙調査を実施した。質問項目は、社会的スキル測定尺度、および、日頃、会話する相手 1 名を抽出させた上で、その相手との親密度やコミュニケーションに関する内容で構成した。抽出した相手との親密度については、金政・大坊(2003)による愛情の三角理論尺度のうち、親密性の因子に関わる 10 項目を採用した。メールの送信に関わる振る舞いは 3 つ(I~III)に分類した上で、計 6 項目を採用し、7 件法により回答させた。「I. 送信回数に関わる振る舞い方」は、(a)メール送信頻度、(b)自ら進んでメールを送る頻度、「II. 双方向のやり取りに関わる振る舞い方」には、(c)受信後、早く返信する頻度、(d)受信後、確実に返信する頻度、「III. メール本文に関わる振る舞い」として、(e)送信メールの内容重視度、(f)送信メール表現を採用した。

(2) 大学生を対象に質問紙調査を実施した。質問項目は、社会的スキル測定尺度、および、自らが発信する SNS 利用時における他者との関わり方(15 項目)を採用した。

(3) 大学生を対象に質問紙調査を実施した。質問項目は、社会的スキル測定尺度の他、自らが発信するソーシャルメディア「発信型」においては、当該ソーシャルメディアに関する認知(12 項目)および他者との関わり方(22 項目)、閲覧のみで自らは発信しないソーシャルメディア「傍観型」においては、当該ソーシャルメディアに関する認知(12 項目)および他者との関わり方(15 項目)を採用した。

4. 研究成果

(1) あらかじめ、親密度および社会的スキルについては、それぞれの程度を高、中、低の3群に分類した。それぞれ親密度要因、社会的スキル要因として、メール送信時に関わる6種類の振る舞いについて比較検討したところ、以下の結果が得られた。

「I. 送信回数に関わる振る舞い方」の(a)メール送信頻度および(b)自ら進んでメールを送る頻度は、親密度の低い者の方が高い者よりも多いという傾向が示された。

「II. 双方向のやり取りに関わる振る舞い方」の(c)受信後早く返信する頻度は、社会的スキルの高い者の方が低い者よりも多い傾向が示された。また、親密度の低い者の方が高い者よりも多い傾向が示された。(d)受信後、確実に返信する頻度は、親密度の低い者の方が高い者よりも多い傾向が示された。

「III. メール本文に関わる振る舞い」である(e)送信メールの内容の重視度は、親密度の高い者のうち、社会的スキルの高い者が低い者よりも重要視する傾向が示された。また、社会的スキルの中程度、低い者のうち、親密度の高い者の方が低い者よりもメール内容をあまり重要視していない傾向が示された(図1)。(f)送信メールの表現は、親密度の高い者のうち、社会的スキルの高い者の方が低い者よりもより一般的な表現を用いる傾向が示された。また、社会的スキルが低い者のうち、親密度の低い者の方が高い者よりも一般的な表現を用いる傾向が示された(図2)。

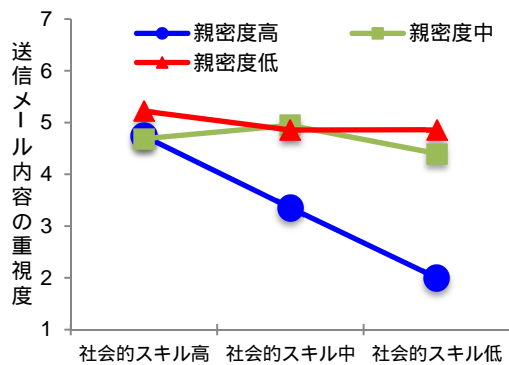


図1 (e)送信メールの内容の重視度の傾向

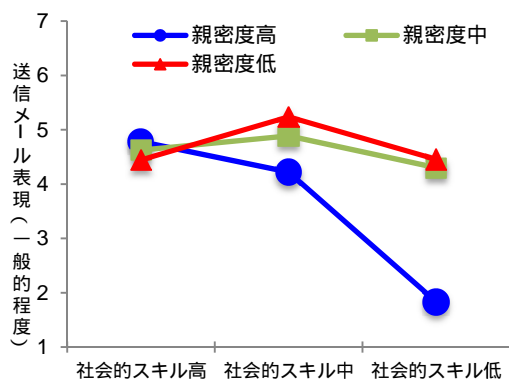


図2 (f)送信メールの表現の傾向

値が大きいく一般的な表現が多く、値が小さい程個性的な表現が多い事を意味する。

以上の通り、親密度の違いや社会的スキルの違いが、送信回数に関わる振る舞い、双方向のやり取りに関わる振る舞い、メール本文に関わる振る舞いに影響を及ぼすことが明らかとなった。また、社会的スキルの高い者の振る舞いを一つの望ましいモデルと捉えるならば、社会的スキルの低い者のメールの表現や内容に対して重視する姿勢の改善すべき側面を明確にすることができると考えられる。

(2) SNS 利用時における他者との関わり方の15項目を分析し、快適性(他者との関わりに伴う良好な感情的側面の因子)、利己的依存関係性、利己的浸透性、積極性の4つの因子を抽出した。また、社会的スキル測定尺度については、対人関係スキル、コミュニケーションスキル、トラブル回避スキル、問題対処スキル、マネジメントスキル、対人配慮スキルの6因子(下位概念)を抽出し、下位概念ごとにスキルの程度を上位群、下位群に分類した。SNS 利用時における他者との関わり方の各因子と社会的スキルとの関連性について分析し、下記の傾向が明らかとなった。

利己的依存関係性においては、対人関係スキルとの関連性が高く、対人関係スキルが高い者は、利己的な依存関係は弱い、対人関係スキルが低い者は利己的な依存関係が強い傾向であると考えられる。利己的浸透性においては、マネジメントスキルとの関係性が高く、マネジメントスキルが高い者は利己的浸透性の関わり方は弱い、低い者は利己的浸透性の関わり方が強い傾向であると考えられる。積極性においては、コミュニケーションスキル、および、問題対処スキルとの関連性が高い傾向が示された。SNS のコミュニティの中でさまざまな問題が生じた場合において、コミュニケーションスキルだけでなく、適切に対処できるスキルが、積極的に大きく関係していると考えられる。

さらに、社会的スキルの違いに着目し、SNS 利用時における他者との関わり方の各因子における傾向を探ったところ、下記の結果が得られた。

快適性については、トラブル回避スキルの上位群の方が下位群よりも高い傾向であり、問題対処スキルも上位群の方が下位群よりも快適性が高かった。トラブル回避スキル、問題対処スキルの高い者にとっては低い者よりも、SNS コミュニティに属する他者との揉め事をより良く回避、対処でき、より高い快適性を享受していると考えられる(図3)。

利己的依存関係性においては、対人配慮スキルの下位群の方が上位群よりも強いことが示された。対人配慮スキルが低い者は高い者よりも他者に対して利己的、依存的な関わり方の傾向が強いと考えられる(図4(a))。

積極性においては、コミュニケーションスキルの高い者の方が低い者よりも高いこと

が明らかとなった。コミュニケーションスキルの高い者は、低い者よりも、SNS のコミュニティに属する他者とより積極的に関わっていると考えられる (図 4(b))。

快適性, 利己的依存関係性, 利己的浸透性, 積極性のいずれの因子からも, 社会的スキルの高い者の方が, 低い者よりも, SNS 上で他者との振る舞いがより望ましい傾向を示していると考えられる。

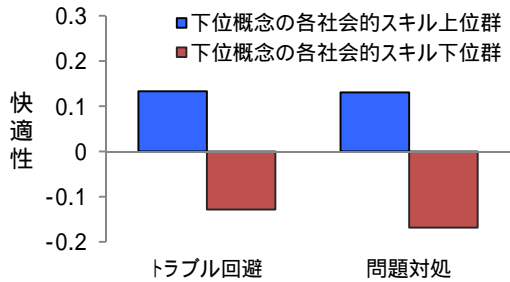


図 3 他者との関わり方 (快適性) の傾向

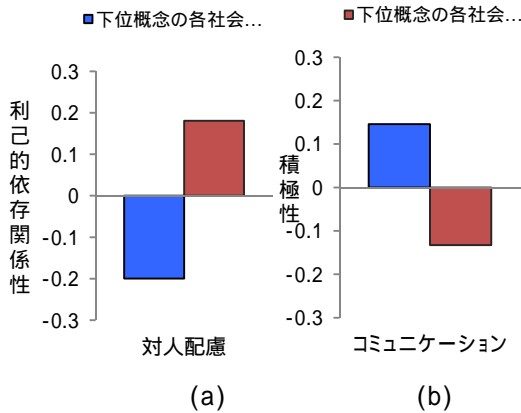


図 4 他者との関わり方 (利己的依存関係性・積極性) の傾向

(3) 社会的スキルについては, その程度を, 上位群, 下位群に分類した。「発信型」「傍観型」双方のコミュニティに対する認知の特徴については, 共通する項目を分析し, 居心地感 (居心地の良さ), 信頼感, 平穩感の 3 因子を抽出した。因子ごとに, 「発信型」「傍観型」と社会的スキルの違いによる傾向を探った。その結果, 居心地感においては「発信型」の方が「傍観型」よりも良い傾向を示した (図 5(a))。信頼感は「発信型」の方が「傍観型」よりも高く, 社会的スキルの高い者の方が低い者よりも高い傾向を示した (図 5(b))。平穩感においては, 「傍観型」のみで社会的スキルの高い者の方が低い者よりも平穩の程度が高い傾向を示した。また, 社会的スキルが低い者の限定的な傾向として, 「傍観型」の方が「発信型」よりも平穩の程度が低かった (図 5(c))。

「発信型」「傍観型」双方の利用時における他者との関わり方の特徴については, 共通する項目を分析し, 親密性, 共感性, 他者理解性の 3 因子を抽出した。因子ごとに, 「発信型」「傍観型」と社会的スキルの違いによる

傾向を探った。その結果, 親密性においては, 「発信型」の方が「傍観型」よりも高い傾向を示した (図 6(a))。共感性は, 社会的スキルが高い者の方が低い者よりも高く, 「発信型」の方が「傍観型」よりも高い傾向を示した (図 6(b))。他者理解性については, 社会的スキルが高い者の方が低い者よりも高い特徴が見られた (図 6(c))。

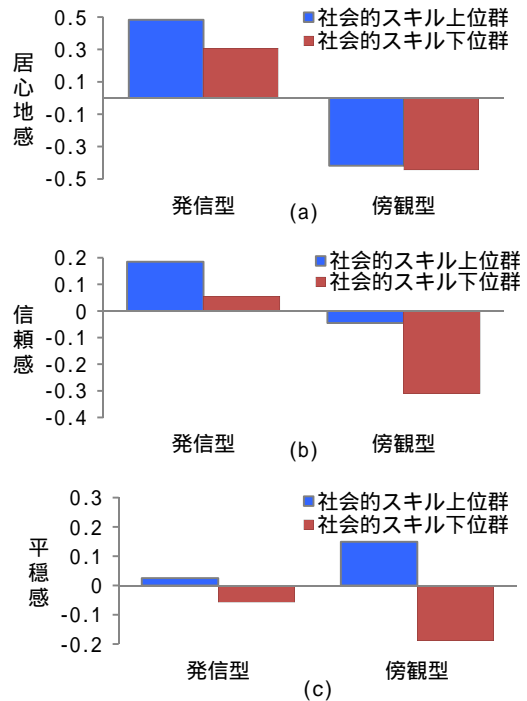


図 5 ネット上のコミュニティに対する認知の傾向

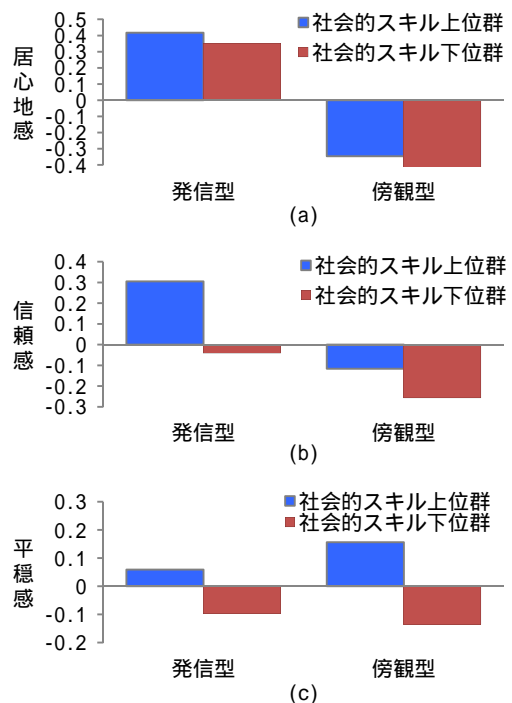


図 6 ソーシャルメディア利用時の他者との関わり方の傾向

他者との積極的な関わりのある「発信型」のみならず、「傍観型」のソーシャルメディアにおいて、社会的スキルの高い者が低い者よりも冷静で、より望ましい他者との関わり方をしている傾向を示していると考えられる。

以上の研究成果を踏まえ、ネットワーク上におけるリアルな社会において、社会的スキルの違いが青少年の他者との関わり方に影響を及ぼしていることが明らかとなった。今回の得られた知見は、ネットワーク利用による協同学習をはじめとする他者との関わり方の活動が重視されるこれからの教育環境の中で、指導方法やカリキュラム開発に有用な知見になり得ると考えられる。

<引用文献>

金政裕司・大坊郁夫(2003)愛情の三角理論における3つの要素と親密な異性関係。感情心理学研究, 10(1), 11-24.
経済産業省(2006)社会人基礎力に関する研究会-「中間取りまとめ」-。
菊池章夫(1988)思いやりを科学する。川島書店。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

石川真,親密さの違いによるメールコミュニケーションの振る舞いに関する研究, 上越教育大学研究紀要, 査読無, 32, 25-34, 2013.

石川真,社会的スキルの違いがネットワーク上の他者との関わり方に及ぼす影響, 上越教育大学研究紀要, 査読無, 33, 11-19, 2014.

石川真,ネット上のコミュニティへの関与の違いが他者とのつながり方に及ぼす影響, 上越教育大学研究紀要, 査読無, 34, 25-33, 2015.

[学会発表](計3件)

石川真・平田乃美,親密さの違いによるメールの振る舞い方に関する研究,日本社会心理学会第53回大会,筑波大学,2012

石川真・平田乃美,ソーシャルネットワーク上のコミュニティにおける他者との関わり方の傾向,日本社会心理学会第54回大会,沖縄国際大学,2013

石川真・平田乃美,ネットコミュニティへの関与の違いに着目した他者とのつながりの傾向,日本社会心理学会第55回大会,

北海道大学,2014

6. 研究組織

(1)研究代表者

石川 真(Ishikawa, Makoto)
上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号:60318813

(2)研究分担者

平田 乃美(Hirata, Sonomi)
白鷗大学・教育学部・教授
研究者番号:20308224
(平成25年度まで連携研究者)